

続「実践的上級SE育成の実際」
—— 考え方の具体例 ——

2U-1

長浜 正道
(株)富士通システム総研

1. はじめに

昨年は「実践的上級SE育成の実際」—— 効果的方法と考え方 —— という標題で、「技法よりも考え方を重視した演習指導」の重要性について述べ、同時に「事務フロー」活用の必要性にも言及した。

本論文では、この「考え方を重視する」ということが具体的にどのようなことなのかについて、事務フローをベースにした実例で紹介する。

2. 演習課題の例

演習課題として、例えば「オフコン導入済のX社における現状受注処理システムの一部」(説明略)を取り上げる。それに関して以下の作業を行わせる。

- ① 現状の処理手続きの事務フロー(図1)の作成
- ② 「①」における問題点の指摘
- ③ 問題点に対する改善イメージの作成

この後は、各グループのアウトプットを比較検討して改善案を決定する。

以上のように演習内容や手順はごく一般的なものである。「考え方を重視した演習指導」の特徴は上記「③」の段階における対応のしかたにある。

3. 「考え方を重視した演習指導」の特徴

「考え方を重視した演習指導」における「考え方」というのは、「ある形態のシステムを考える場合に、それをどのような観点に立ってどのように考えるか」ということであり、「重視する」というのは「それを徹底的に追求する」ということである。

従来この種の演習においては、コンピュータ技術に傾斜するあまり、現場の実態を十分に考慮することなく演習結果を安易に解答例に結びつけてしまう傾向が強かった。「考え方を重視した演習指導」では、解答例はあくまでも一つの例として位置づけし解答作成過程における考え方を重視する。

4. 「考え方」のポイント(例)

上記の演習課題の場合を例にとり「考え方」を追求する際の着眼点を示す。(図2~5)

5. まとめ

例に示すようにこの種のグループ演習においては、演習結果を単純に解答例と比較するのではなく、指導者が演習の過程のポイントとなる箇所ですら随時ヒントやコメントを与え、多面的な議論を展開させながら、より良い方向へ誘導してゆくことが大切である。

図1 顧客(幼稚園)からの受注[現状]

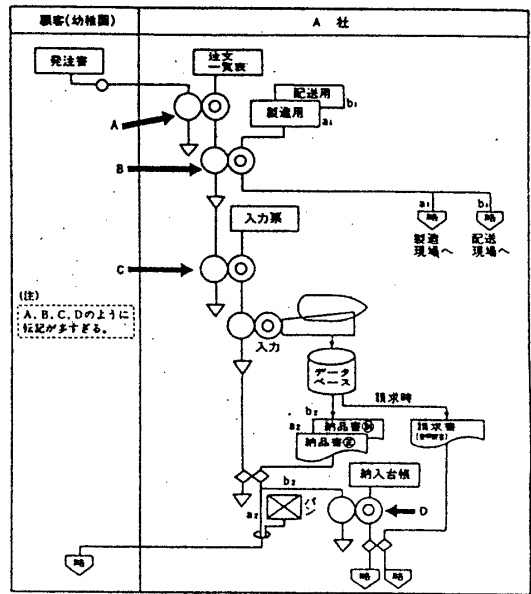
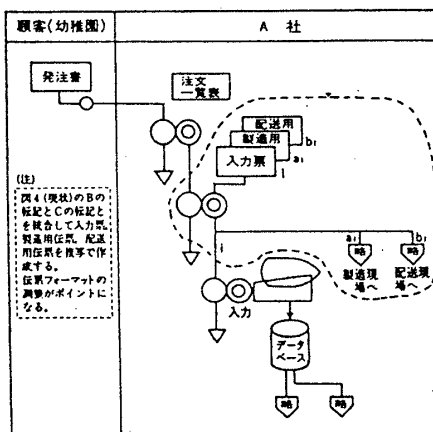


図2 ①の改善イメージ

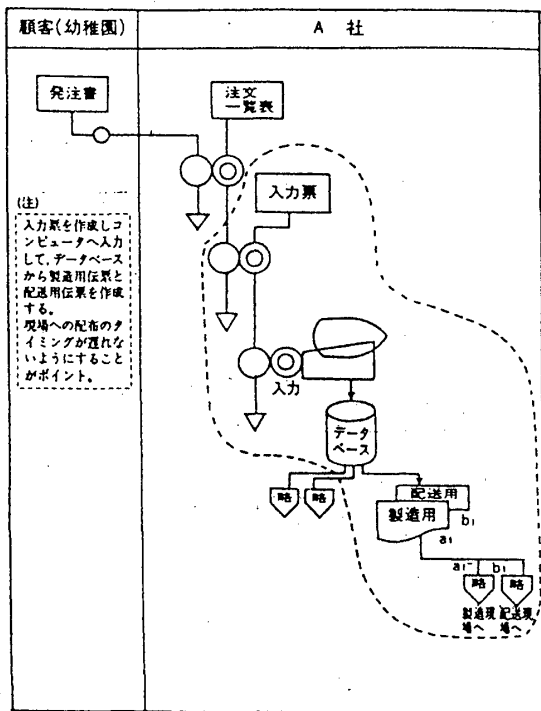


① 最も簡単な改善方法としては、「B」の転記により a₁, b₁ を作成するのをやめて「C」の入力票作成と a₁, b₁ の作成とを同時に複写で行うようにする。この場合、改善システムのイメージは図5のようになる。

このシステムを設計する場合のポイントは「複写で作成する帳票のフォーマットをどのようなものにするか」という点である。すなわち、3つの異なる処理に使用する帳票を複写で作成することになるので、いかに各処理に適合するフォーマットを決定するかが問題になる。

入力処理の重要性を考えると、「入力票として必要な条件を保持しながら同時に製造および配送の現場で使用しやすいようにするには、どのような帳票設計をすればよいか」という点に注目しなければならない。

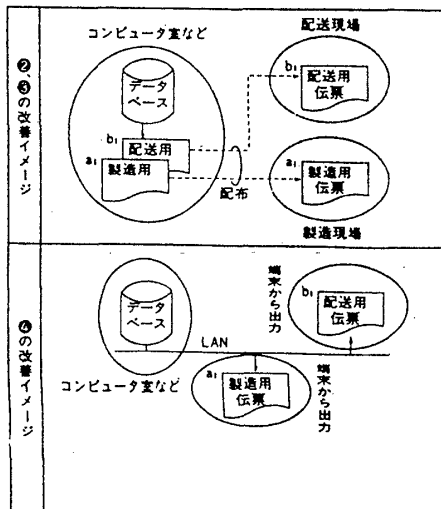
図3 ②の改善イメージ



③ 条件さえ許せば、上記の2つの方法よりさらに合理的なのが「A社側から顧客側に発注用の帳票用紙を支給し、それに記入して発注してもらう」という方法である。

この方法は、顧客側の了承が得られることが前提になるので、少なくとも顧客側にデメリットをもたらさないことが必要条件になろう。したがって、顧客側の発注システムが確立されている場合は一般に了承を得るのが困難なことが多い。このケースの場合は、この点では問題はなかった。この方法をとった場合は、発注書を受け取り次第データ入力することになるので、 a_1 , b_1 はコンピュータから出力されることになる。

図5 ④の改善イメージ(②,③のイメージとの比較)

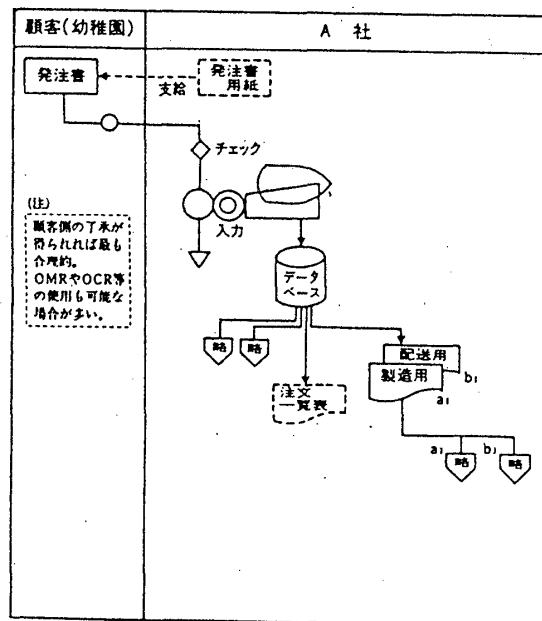


② ①よりも改善レベルを上げようとするれば、 a_1 , b_1 をコンピュータから出力する方法が考えられる。この場合、改善システムのイメージは図3のようになる。

このシステムを設計する場合のポイントは「 a_1 , b_1 がコンピュータから出力されるタイミングが製造・配送の現場の要求に合うか(それを必要とする時刻までに間に合うか)」という点である。システム運用上、この点で問題がある場合はこの方法は採用できなくなる。細かいことは省くが、このケースの場合は入力データの量や属性などからみて問題はないと考えられる。

なお、このような形態をとる場合、このケースのように発注される品目が限られていれば(この場合は「何種類かのパン」)、発注書の用紙にあらかじめそれらの品目名を印刷しておき、マーク方式や行番号入力方式を採用することによって入力作業を大幅に軽減することも可能であり、どのような工夫をするかが大きなポイントとなる。

図4 ③の改善イメージ



④ 今回のケースでは以上の3つの考え方が改善案作成のベースになるが、一般的に考えると、理論的には製造・配送の現場へ配布する前出 a_1 , b_1 の帳票に関して、それぞれの現場に端末機を置いてそれを直接発行するオンラインシステムを考えることができる。大規模な企業や現場が離れた場所にある場合にはそのような形態が適当な場合もあろう。最近では端末としてパソコンを使用することが多いので、その場合はパソコンのディスクに伝票用のデータを転送しておいてから出力するのが一般的であろう。これを②, ③のシステムと比較すると図5のようになる。